

散つてなお花筏

編集後記に代えて

馬場駿

岩漿十九号の編集が進み始めた弥生三月の十一日、日本のみならず世界を震撼せしめた「東日本大震災」が発生した。マグニチュード九・〇、数万人を呑み込んだ何百年に一度という大津波、福島原子力発電所の「破壊」、これから発生した計画停電、放射物質の拡散、経済低迷という恐怖の連鎖「津波」。そんな中、四月に入つてすぐ、拙宅の前の伊東大川端の染井吉野の大木が、例年をはるかに超える鮮やかさで満開となった。それから数日後、温かな風を得て宙に舞い、次々と川面に落ちた花びら。急くように前の花びらを押しながら、あの被災地の海にも繋がる相模灘に向かって下る桜色の群れ・・・私は、茫としてそれを見詰め、何の脈絡も無い一つのことに関われ始めた。今度の十九号で私の中の『岩漿』が終わる。会の代表と編集長を辞する。過ぎてきた同人誌十二年余の歳月が、私の頭の中を駆け巡つたのだ。

平成九年、伊東市池の「石ばし庵」に集つた詩人小山修一氏、小説・随筆の森岡映雄氏、詩人・随筆の秋藤俊氏、小説の木内の四人。それに当日参加はできなかったが小説・随筆の深水一翠氏。この五人の発起人が産んだ同人誌が『岩漿』（マグマの意）であった。当日、書家でもある秋藤氏が墨痕鮮やかにロゴを描いた。小説に限定せずに文藝一般を扱い、自由な作風を尊重する。全員が同人雑誌、会誌などの編集に携わつた経歴の持ち主だけに、合評の弊害を知つていたので。

創刊は出来ても継続しがたいのが常。第二号で早々に「三号雑誌」の警句の意味を思い知らされた。少ない原稿に慌てた私は、頁割負担金にして十二万円余の額になる応募予定作『夢の海』を岩漿用作品に換え、一方で商業誌「公募ガイド」の無料広告を利用して仲間を募つた。このときに小説の岩越孝治氏、童話の田村春氏等大勢が入会する。また、静岡県東部の公立図書館に加え、国立国会図書館に規定数三冊を納め、定期刊行雑誌として番号を得る。文学界同人雑誌係にも送付を開始。会員も五名から二十九名に膨れ上がった。特筆すべきは伊東の郷土史研究家森山俊英先生の支援

と参加だ。サガミヤ書店との縁も先生から。後の歴史家の諸氏や市議とのご縁も先生に源を発する。会員は漸増し三号で四十一名、四号で五十一名に達する。年に動かせる資金は七十万円余、年間二回の発行を賄うことができた。また、三号から詩人の阿部英雄先生が寄稿してくださり、地元同人誌を主宰していた平田雅子氏も加入した。もう一つ、小田原の画家近藤満丸氏が表紙や口絵・カットを、この三号から担っている。未熟な同人誌は大勢の師に囲まれて図体先行で成長していった。四号からは、以後『岩漿』の知的な顔となる歴史研究家桜井祥行氏が参加、読者をして正座せしめる作品を掲載し続けることになる。有識者森山直介氏をして涙せしめた詩「たあちゃんへ」を創った日吉睦子氏は四号から。写真家ジョニー・ハイマスの心を識る畏友浦船健之助氏が写真「越後」を載せるのが五号。この号から馬場駿の連載小説「孤往記」が始まる。そして六号。森周映雄氏がこの号の編集長を務め、岩漿に新鮮な一石を投じた。会員数は七号、八号と五十名を確保するが、九号から減少傾向を示し、以後その流れは止まらなかつた。平成十四年十月、危機感を露

にした岩漿編集部は、冷えたマグマを加熱すべく「十号特大号」を企画する。それは岩漿作家のプライドに訴える一種の賭けだった。結果は百九十五頁、小説数六、執筆参加者十六名という岩漿史上最大の規模となった。偶然であろうが、この頁数は今次発行の十九号と同じである。この号、岩越氏が「招魂祭」で「吾妻鏡」を下敷きにした時代小説を発表して非凡な語り部ぶりを披露、以後巻末を飾る小説の常連となった。次いで十三号では、桂川ほたる（平田氏の筆名）が「愛娘」で長編デビュー、今号の「銀塔虫」に繋がる独特の小説世界を展開している。にもかかわらず、同人誌岩漿のマグマの冷えはしだいに顕著になっていく。十六号を「第二期創刊号」と銘打って、執筆者の心のリセットを誘引しようとした所以だ。頁数も百三十九と検討したが、この号が阿部先生の追悼号になったのは、或る種の予兆か。発行人小山氏と編集者の私が追悼文を載せている。年二回の発行は、資金難と、現役世代が殆どという当文学会の特色からくる作品不足に因り、いつしか年一回がやっとなった。書き手は号を重ねることに少なくなり、数人の書き手が複数の筆名を使

って表面的な賑やかさを保つ傾向に拍車がかかった。もっともそんな中でも朗報はあった。会計役柳田圭一氏の登場である。「マサレのない国」の著者でもある氏により、「マグマの集い」という会員の集会が始まり、「会報マグマ」も十回以上発行された。

編集部は九号あたりから、印刷屋に編集や校正、版下作りを依頼する費用を節約するため、「版下」に近いものまで用意し、印刷と製本だけをプロに頼むという雑誌作りに移行していた。これにより一発行三十数万という費用を半減させた。動かせる年間資金が十五六万にまで落ち込んでいたのだ。発行後の配布用切手も、小山美智子氏、浦船氏、日吉氏、木内正夫氏などの寄付に頼っていた。同人誌は、目的、会員、資金、作品のどれを失っても存続が困難になる。十六、十七、十八号と、この意味では「青息吐息」の発行が続いた。むろん私自身の多忙や体調不良、諸々の意味での経年劣化もあるが、自作を本に載せることに対する感動が、会員の中で小さくなってきたことが主因ではないのか。ただ、代表という「牽引者」の責任は免れない。今回の辞意表明は、私の中では必然に近いものだった。

ようやく同人誌として全国的に認知された『岩漿』。優れた後継代表を得て、この後も二十、三十と号を重ねることを願わずにはいられない。